

中村恭一（著）

大腸癌の構造（第2版）

高木 篤

協立総合病院消化器内科

本書はいまだに世界的に信じられている「大腸癌の多くは腺腫から発生する」という Morson の“腺腫-癌連続学説(adenoma-carcinoma sequence)”を徹底的に論破し、「大腸癌の大部分は正常粘膜から発生する」という *de novo* 学説を体系的に対置した本である。

本書は複数の執筆者による見解をオムニバスの集めただけの安易な本ではない。一人の著者の極限の思索によって書き下ろされた渾身の書であり、骨太で一貫性のある論理構造を持つ科学書である。癌・腺腫・非腫瘍を画像的に客観的に診断する判別式を完備し、腫瘍発生の基本概念、診断基準、組織発生、臨床病理を整合性をもって見事に解説している。

著者の中村恭一先生は問いかける。大腸以外の臓器では正常粘膜からの *de novo* 発生が主体であるのにバウヒン弁を越えたらなぜ突然腺腫が発癌の主体になるのかと。言われてみればもっともである。そして著者は「トンネルを抜けたらそこは雪国だった」などとユーモラスな比喩を

駆使しながら腺腫-癌連続学説の矛盾点を逐一指摘し *de novo* 学説を対置して圧倒していく。まさに「論理は権威より強し」である。そこにはオセロゲームの黒一色の盤を四隅を白にしてすべて白にひっくり返していくような痛快さがあり一気に読ませてしまう。それが本書の第1版が1989年に出版されてからロングセラーを続けている理由だろう。

著者は腺腫-癌連続学説が世界の常識だった1984年に *de novo* 学説を敢然と主張し異を唱えた。1984年といえば1986年に工藤によって大腸Ⅱc型 *de novo* 癌が報告される「有史以前」である。著者の主張は当時から全くぶれていない。1989年に本書の第1版が出版されて以来、本書は預言の書として北極星のように不滅の道標であり続けた。小林・益川理論に導かれて残りのクォークが発見されたように、本書に導かれるように工藤進英先生の薫陶を受けた秋田学派らによってⅡcを含む微小な *de novo* 癌が多数発見されてきた。歴史的な本でありながらその正しさと重要性は今日においてその輝きを

増している。

第2版にあたり鮮やかなカラー版として蘇っただけでなく、多くの *de novo* 癌の知見と白壁フォーラムの約五千例の2cm以下の大腸癌による詳細なデータ解析が加わりさらに説得力が増した。今後データを集積していけば日本発の病理診断基準が世界のスタンダードになる日も夢ではないだろう。

本書を読むと、大腸内視鏡ではほとんど進行癌にならないポリープに目を奪われることなく、胃カメラのように正常粘膜に潜んでいるⅡcなどの宿主の生命を奪う *de novo* 癌を見落とさないことが大事だと痛感する。*de novo* 学説でなければ大腸癌死を減らすことはできないとさえ思う。

その意味で本書は大腸癌発育進展の学徒のみならず大腸癌診療にかかわるすべての人にとって必読の書であるといえよう。

●B5/頁 232/2010 年/定価 12,600 円（本体 12,000 円+税 5%）

[ISBN978-4-260-01143-3]

医学書院 刊